



Title	スワヒリ語を話すルワンダ人
Author(s)	片山, 夏紀
Citation	スワヒリ＆アフリカ研究. 2023, 34, p. 70-87
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91115
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

スワヒリ語を話すルワンダ人 Rwandan people who speak Swahili

片山 夏紀*

KATAYAMA, Natsuki

0. はじめに

アフリカ中部の東寄りに位置するルワンダ(図1)では、1400年代の王国時代からルワンダ語(*kinyarwanda*)が広く話されてきた。いわゆる「単一言語国家」とみなされるほど、ルワンダにおいてルワンダ語は有力な言語である(Walker-Keleher 2006: 36)。2002年の国勢調査によればルワンダ語を話す居住者の割合は99.7%に及ぶが¹⁾、言語政策や教育制度に外国語が導入された歴史的背景がある。ルワンダはヨーロッパの国々から統治されるとスワヒリ語(*igishwili*)が行政言語になり、独立を果たすとフランス語(*igifaransa*)の教育に力が入れられ、ジェノサイド(集団殺害)が終結すると英語(*icyongereza*)の普及に力が入れられた²⁾。

これらの外国語のなかでも、ルワンダと縁が深いのはスワヒリ語である。ルワンダはスワヒリ語圏と隣接する地勢であり、ルワンダ人はスワヒリ語圏の人々と接点をもつ。昨今はこれらの国々と連携を目指して公用語にスワヒリ語が追加され、義務科目になった。それに加えて、ジェノサイド後にスワヒリ語圏から帰還したルワンダ人はスワヒリ語を話す。このようにルワンダとスワヒリ語の縁が深い事情を踏まえ、本稿の目的は、ルワンダ人がどのような背景でスワヒリ語を話すのか、彼らがスワヒリ語に対してどのような言語態度をもつのかを考察することである。

ルワンダで話される言語に関する先行研究は、英語について論じたものがほとんどであ

* 大阪大学外国語学部非常勤講師 (School of Foreign Studies, Osaka University)

¹⁾ Ministry of Finance and Economic Planning National Census Service 2005: 41

²⁾ ジェノサイドは、古代ギリシャ語で種を表す *genos* と、ラテン語に由来し殺害を意味する *cide* を組み合わせた造語であり、刑事責任が問われる国際法上の重大犯罪である(石田 2011: 3)。1948年の国連総会で採択された「集団殺害罪の予防と処罰に関する条約」(ジェノサイド条約)第2条によれば、ジェノサイドは、「国民的、民族的、人種的または宗教的な集団の全部または一部を集団それ自体として破壊する意図をもって行われる」行為である。なおこの行為は殺害に限らず、性的暴力、拷問、麻薬の強制使用、身体切断、人体実験など多岐にわたる(石田 2011: 5)。

る。論じられているのは、なぜ教授言語がフランス語から英語に変わる必要があったのか (Samuelson and Freedman 2010)、その変更に教員や学生は対応できているのか (北川 2015)、またどのように感じているのか (Maniraho 2013)、といったことにとどまっている。スワヒリ語の言語政策に関する先行研究は、沓掛 (2018) がある。沓掛 (2018) はルワンダの公用語にスワヒリ語が追加された経緯を詳述しているが、スワヒリ語を話すルワンダ人の背景とスワヒリ語に対する彼らの言語態度は詳述されていないため、本稿はその部分を補う。

本稿のアプローチは次のようなものである。2009～2016 年に現地調査³⁾を実施した際に会ったスワヒリ語を話す人々との経験と、ルワンダ人およびルワンダに在住する日本人にソーシャル・ネットワーキング・サービス (SNS) で行った聞き取りである。調査協力者が特定されないよう氏名は記載せず、性別と年代を記載する。

1 節ではルワンダの概要を述べ、2 節では言語に関わるルワンダの略史を示す。3 節ではルワンダの公用語の変遷、4 節ではルワンダの教育制度および教授言語を概観する。5 節では、スワヒリ語を話すルワンダ人の背景とスワヒリ語に対する彼らの言語態度を考察する。6 節で結論を述べる (なお、本稿に出てくる国名および地名の位置は図 2 を参照のこと)。

1. ルワンダ概要

ルワンダの人口は 1,263 万人 (2019 年)、国土面積は 2 万 6,338 平方キロメートルで四国の約 1.5 倍である。人口の約 70% が農業に従事し (Rwanda Development Board)、丘を利用してつくった段々畑に料理用バナナ、キャッサバ、イモ類、豆類、トウモロコシ、サトウキビなどを栽培している。主な輸出品はコーヒーや紅茶の農産物であり、他に力を入れている産業は情報通信技術 (Information and Communication Technology: ICT) である。

ルワンダ史上最も凄惨な出来事は、1994 年のジェノサイドである。被害が甚大であった追悼施設には犠牲者の頭蓋骨や遺品の十字架が並べられ、凄惨な史実を物語っている⁴⁾。

ジェノサイド後は「アフリカの奇跡」と称されるほど目覚ましい発展を遂げた。首都キ

³⁾ 現地調査の内容は、ルワンダのジェノサイドについてである (片山 2020)。

⁴⁾ 2009 年 8 月 31 日に追悼施設を訪問した。東部州ブゲセラ (Bugesera) 郡のンタラマ (Ntarama) 教会では、教会に避難した 5,000 人以上が虐殺された。ニヤマタ (Nyamata) 教会では、教会に避難した約 1 万人が虐殺された。追悼施設には、犠牲者の叫びとして紫色の布に次のルワンダ語が書かれている。「もしあなたが私を知っていれば、あなたがあなた自身を知っていれば、あなたは私を殺さなかった」 (*Iyo umenya nawe ukimenya ntuba waranyishe*)。この叫びは加害者に限らず、ジェノサイドに関心を払わなかった国際社会にも向けられている。

ガリ (Kigali) には高層ビルが建ち並び、ジェノサイドが起こったとは想像できないほど様変わりしている。2010～2019 年の平均経済成長率は 7.2%と高い水準を記録している (The World Bank in Rwanda)。ルワンダと日本の繋がりをみると、国際協力機構 (Japan International Cooperation Agency、以下 JICA) は教育、情報通信技術、農業開発／農村開発など 6 つの分野にわたり 17 のプロジェクトを実施し (JICA)、派遣された青年海外協力隊は 300 人を超える (JICA 海外協力隊)。民間レベルでも意欲ある日本人がルワンダに在住し、事業経営や NGO の運営に果敢に取り組んでいる⁵⁾。また近年は日本とルワンダの大学が留学生を受け入れ合う制度がつくられ、学術交流も広がっている⁶⁾。

2. ルワンダの略史

ルワンダは内陸に位置しているため、王国時代は外部との接触が少なく、当時ルワンダ語は唯一の現地語であった (Ntakirutimana 2012: 5-6)。ルワンダ語は、諺や謎々や物語などの豊かな口承文芸を語り継いできた (Ntakirutimana 2012: 6-7)。このようにルワンダではルワンダ語でコミュニケーションが取られてきたが、外国の統治が始まると外国語が組み込まれてきた。本節では支配言語が移り変わってきた歴史的背景を述べる。

1899 年にルアンダ (現在のルワンダ) はドイツ領になり、同じくドイツ領のウルンディ (現在のブルンジ) と合わさり、ルアンダ・ウルンディとなった (鶴田 2018: 49)。1885 年にタンガニーカ (現在のタンザニアの大陸部) はドイツ領になっていたため、これら 3 国がドイツ領東アフリカとなった。

第一次世界大戦後、国際連盟の委任統治制度によりルワンダはドイツに代わってベルギーに統治されることになった。第二次世界大戦後、国際連合が設立されると委任統治制度は国連信託統治制度に引き継がれ、1962 年までベルギーに統治された。

ルワンダの 3 つの「民族」について補足すると、現在のおおよその人口比率はフトゥ (Hutu) が 8 割強、トゥチ (Tutsi) が 1 割強、トゥワ (Twa) が 1%程度といわれる (武内

⁵⁾ 民間事業経営の事例として、木下一穂氏が経営する養豚事業がある。NGO の事例として、ルダシングワ真美氏とガテラ (Gatera Rudasingwa Emmanuel) 氏らが義足を製作し無償で提供するムリンディ／ジャパン・ワンラブ・プロジェクトがある。

⁶⁾ 国際連携教育プログラムとして東京外国語大学はルワンダのプロテスタント人文・社会科学大学 (Protestant Institute of Arts and Social Sciences: PIASS) と互いに留学生を受け入れ合っている。またルワンダ人留学生を受け入れている大学は、神戸情報大学院大学、政策研究大学院大学、東京大学、立命館アジア太平洋大学、慶應義塾大学などがある。

2009: 83)。ただし、王国時代に「民族」は固定されていなかった⁷⁾。しかし 1930 年代にベルギー統治局はルワンダ人を体型で分けて「民族」を固定した。長身で痩せ型の者はトゥチ、やや低身長でずんぐりとした者はフトゥ、短身の者はトゥワに分けられ、身分証明書に民族名が記載された⁸⁾。

ドイツとベルギーの統治局は「民族」を分けて、トゥチを優遇した。それは、王国時代からトゥチの王が国家権力を握り、またトゥチが白色人種の血を引くという思想の「ハム仮説」が信じられていたからだといわれている⁹⁾。ただしこの仮説は現在科学的根拠が無いという理由で正当性を失っている（武内 2009: 87-91）。

統治末期に多党制が導入されると、フトゥの人口が圧倒的に多いことからフトゥ中心の政党が勝利し、それまで優遇されていたトゥチが排斥された。約 20 万人のトゥチがウガンダをはじめとする近隣諸国に逃れた（Long 2012）。これによりフトゥ中心の政党が政権を執る体制になった。これが「社会革命」（*Révolution sociale*）である¹⁰⁾。ルワンダは 1962 年に独立を果たし、フトゥの大統領が就任した。

「社会革命」でウガンダに逃れたトゥチ難民は長年難民キャンプでの生活を強いられ、ウガンダの市民権を得ることができなかった（武内 2009: 260）。難民キャンプで育ったトゥチの第 2 世代は、ルワンダへの帰還を目指し、1987 年に武装勢力「ルワンダ愛国戦線」（*Rwandan Patriotic Front*、以下 RPF）を組織した（武内 2009: 260）。

RPF は 1990 年にルワンダに侵攻し、フトゥ政権との内戦が始まった。3 年後にタンザニアのアルーシャ（*Arusha*）で和平合意が締結されたが、対立は続き、1994 年 4 月 6 日にルワンダのフトゥ大統領の搭乗機が撃墜された（鶴田 2018: 227）。この事件が引き金になり、ジェノサイドが引き起こされた。フトゥ政権の急進派は、この事件を RPF の犯行であるとし、RPF および国内のトゥチを殺害するようプロパガンダを流した。フトゥの民間人

⁷⁾ トゥチとフトゥの起源の詳細は Vansina (2004: 134-139) を参照。王宮から派遣された者をトゥチ、地元の者をフトゥ、あるいは戦闘員をトゥチ、非戦闘員をフトゥとしたように、誰をトゥチ、誰をフトゥとするのかは時代と地域によって異なっていた（鶴田 2018: 42）。なおトゥワが中部アフリカに広く居住する狩猟採集民（ピグミー）に属し、彼らがこの地域の先住民であることについては、現在のところ特段の異議申し立てはなされていない（武内 2009: 94）。

⁸⁾ 「民族」の詳細は武内（2009）や鶴田（2018）を参照。

⁹⁾ ハム仮説の詳細は鶴田（2018）第 1 章を参照。

¹⁰⁾ 「社会革命」をカッコ付きで記す理由は、フトゥのエリートがこの革命を封建的な王政を打破し民主的な共和制へ進歩させたと捉える価値観を含意しているためである（武内 2009: 159）。それに異を唱えるトゥチ中心の現政権は、この革命を「トゥチに対する虐殺」と捉えている（武内 2009: 159）。「社会革命」の経緯の詳細は鶴田（2018）第 2～6 章を参照。

も煽動され、ジェノサイドに加担し、50 万人以上のトゥチが虐殺された¹¹⁾。加担したフトゥ民間人は甚大で、約 100 万人が裁かれたほどである (NSGC 2012: 37)。1994 年 7 月 18 日に RPF はジェノサイドを終結させ、ルワンダの政党となり、政権を執った。

3. ルワンダの公用語の変遷

まず初めにルワンダの行政言語の移り変わりを辿る。1899 年にルワンダがドイツ領東アフリカになると行政言語はスワヒリ語になった (Ntakirutimana 2012: 8)。スワヒリ語は同じドイツ領東アフリカのタンガニーカの商人やイスラム教徒が使っていた言語である (Ntakirutimana 2012: 8)。スワヒリ語は貿易に有利な都市部で使われたことで植民地内外に普及し、ルワンダでもスワヒリ語が行政言語になった (Ntakirutimana 2012: 8)。第一次世界大戦後はドイツからベルギーに統治国が移り、行政言語はスワヒリ語からフランス語に変わった (The Conversation)。1962 年にベルギーから独立し、憲法第 5 条は国語をルワンダ語、公用語をフランス語とルワンダ語に定めた¹²⁾。ジェノサイドが終結すると、2003 年憲法第 8 条は公用語に英語を追加した。これは、現政権の中枢がトゥチ難民であったことが影響している。彼らはウガンダで育ち、ウガンダはイギリスの保護領で公用語が英語のため、トゥチ難民の多くは英語を話す。

ルワンダ政府が英語の普及を進める要因の 1 つは、2009 年にイギリス連邦 (Commonwealth of Nations) に加盟したからである¹³⁾。イギリス連邦は、イギリスと歴史的な繋がりをもつ国々で構成される連合で、繁栄、民主主義、平和の共通目標を掲げる (The Commonwealth)。2022 年 6 月にルワンダの首都キガリでイギリス連邦の首脳会議 (Commonwealth Heads of Government Meeting、以下 CHOGM) が開催されるなど¹⁴⁾、ルワ

¹¹⁾ 犠牲者数については、ルワンダ政府は 100 万人、国連は 80 万人と主張している。デス・フォーギス (Alison Des Forges) は、ジェノサイド以前のトゥチ人口 65 万 7,000 人からジェノサイド生存者トゥチの人口 15 万人を引くと、トゥチの犠牲者数は 50 万 7,000 人になると推測する (Des Forges 1999: 15)。具体的な数字を根拠に挙げていることから、本稿は彼女の主張に従う。

¹²⁾ ルワンダ共和国大統領府法制局 (Service de la Législation de la Présidence de la République Rwandaise) 発行

¹³⁾ ルワンダは 1996 年 2 月にイギリス連邦への加盟申請を行った。その後加盟交渉は停滞したが、2008 年 2 月から協議が始まり、調査団がルワンダを訪問した。報道の自由や司法の独立性、人権侵害に関して批判的な意見があったが、複数政党制であること、女性の国会議員の比率が高いこと、汚職が少ないことなどが評価された (鶴田 2018: 267)。加盟国 56 カ国のうち、ルワンダは 54 カ国目である (北川 2015: 153)。

¹⁴⁾ CHOGM では数多くの議題の中で「ガバナンス・人権・法の支配」が扱われ、共同声明には民主主義の価値や表現の自由といったキーワードが含まれた。しかし、ルワンダのカガメ (Paul Kagame) 大統領の独裁的な政治はこの価値観に矛盾するという批判がある (NewSphere)。

ンダ政府はイギリス連邦に積極的に参画しているため、英語の普及が進められている。

ルワンダは2007年に東アフリカ共同体（East African Community、以下 EAC）に加盟したことで、スワヒリ語の普及に力を入れるようになった。EAC は東アフリカ諸国の発展と相互利益のため、政治、経済、社会などの分野で加盟国間が協力することを目指す地域共同体であり、域外に対する関税に共通の制度を適用する関税同盟を発足させ、経済統合を図っている¹⁵⁾。EAC は英語が公用語でスワヒリ語はリンガ・フランカとして発展が望まれるという位置づけであったが（沓掛 2018: 4）、2016 年 8 月にスワヒリ語を公用語として定める決議案が承認された（The Citizen）¹⁶⁾。EAC は加盟諸国にスワヒリ語化の要請を行い、ルワンダ政府はそれを受けて迅速に対応し、2017 年に公用語にスワヒリ語を追加した（沓掛 2018: 4）¹⁷⁾。

4. ルワンダの教育制度と教授言語

ルワンダの教育制度は 6-3-3-4 制であり、最初の 6 年がプライマリースクール（Primary School）、それに続く前半の 3 年がセカンダリースクール（Secondary School）普通レベル（Ordinal Level）、後半の 3 年が上級レベル（Advanced Level）、最後の 4 年が大学である。義務教育はプライマリースクール 6 年とセカンダリースクール普通レベル 3 年までの計 9 年である。2003 年にプライマリースクール 6 年を無償にし、2009 年にセカンダリースクール普通レベル 3 年までを無償にする 9 カ年基礎教育制度（Nine Year Basic Education）が導入された（北川 2015: 154）。

ルワンダの教授言語の移り変わりをみると、ドイツの統治下ではスワヒリ語とルワンダ語が競合していた（Ntakirutimana 2012: 8）。ベルギーの統治下ではルワンダの伝統的な学校が廃止され、フランス語で教育する学校が増えた（Ntakirutimana 2012: 8）。

独立以降ジェノサイドまでの教授言語は、プライマリースクールではルワンダ語、セカンダリースクールではフランス語であった（Samuelson and Freedman 2010: 193）。教育現場に限らず、当時のルワンダ社会における支配言語はフランス語であった¹⁸⁾。しかし 1996 年

¹⁵⁾ EAC のルワンダ以外の加盟国はケニア、タンザニア、ウガンダ、ブルンジ、南スーダン、コンゴ民主共和国（以下コンゴ）である。コンゴは 2022 年に加盟が承認されたばかりである（EAC）。

¹⁶⁾ EAC が共通言語をスワヒリ語に定めた経緯の詳細は沓掛（2018）を参照。

¹⁷⁾ 2017 年 4 月 20 日付の基本法 no.02/2017

¹⁸⁾ 当時のルワンダでフランス語が優勢であったことを裏付ける書籍は服部（2009）である。日本人の服部正也氏は 1965～1971 年までルワンダ中央銀行で総裁を務め、ルワンダの大統領や官僚のエリートと終始フランス語でやりとりをしていた（服部 2009）。

に RPF 政権は英語を普及させる変革に乗り出し、プライマリースクール 1～3 年はルワンダ語、それ以降はフランス語または英語を選択する制度に変えた（北川 2015: 154）。

これは学生の保護者が言語を選択する方式であるが、この変革には思わぬ落とし穴があった。独立からジェノサイドまでフトゥが政権を執っていた時期はフランス語の教育に力を入れていたため、その時期に教育を受けたフトゥの保護者はフランス語を選択した。一方で、「社会革命」で海外に逃れウガンダなどの英語圏で英語を学んだトゥチの保護者は英語を選択した。この選択制度により、誰がフトゥで誰がトゥチかが明るみになってしまったのである（Walker-Keleher 2006: 46）。ルワンダ政府はジェノサイドで特定の民族が殺害された過去を反省し、ジェノサイド後は民族を分けず「ルワンダ人」として統合する政策を進めている。にもかかわらず、この教授言語の選択制度は民族を分けた過去に戻ると批判された。

その批判を受けて、2009 年にルワンダ政府はプライマリースクールからセカンダリースクールまでの教授言語を全て英語に統一した。しかし初等教育から全て英語という極端な変革に歪みが生じ、2 年後にプライマリースクール 1～3 年までの教授言語はルワンダ語に戻された（北川 2015: 154）。

次にルワンダのスワヒリ語教育をみる。2017 年にスワヒリ語が公用語に追加されると、セカンダリースクール普通レベルは義務科目になり（APA News）、1 週間あたりのスワヒリ語の学習時間は 2 時間である（写真 1）¹⁹⁾。セカンダリースクール上級レベルは選択科目になり²⁰⁾、1 週間あたりのスワヒリ語の学習時間は 7 時間である²¹⁾。セカンダリースクール終了後も、国立のルワンダ大学（University of Rwanda: UR）では、引き続きスワヒリ語を学ぶことができる²²⁾。

¹⁹⁾ 2022 年 6 月 18 日、SNS で行った筆者によるセカンダリースクールのルワンダ人教員への聞き取りより。

²⁰⁾ セカンダリースクール上級レベルの選択科目は、物理学、化学、数学、生物学、地理、経済学、歴史、英語、フランス語、ルワンダ語、スワヒリ語、コンピュータサイエンス、文学のなかから 3 科目を組み合わせる。言語の組み合わせは「英語-フランス語-ルワンダ語」あるいは「英語-スワヒリ語-ルワンダ語」のいずれかである。

²¹⁾ 2022 年 6 月 18 日、SNS で行った筆者によるセカンダリースクールのルワンダ人教員への聞き取りより。

²²⁾ かつてはルワンダ国立大学（National University of Rwanda: NUR）のアフリカ言語学科でスワヒリ語を学ぶことができた。しかし、2008 年の学制改革でこの学科が廃止された（Rurangirwa 2012: 173）。2013 年にルワンダ国立大学はルワンダ大学に統合され、そこに新設された文化社会科学部の現代言語学科でスワヒリ語を学ぶことができる（Rurangirwa 2012: 173）。

写真 1. ルツィロ（Rutsiro）郡のセカンダリースクールの授業風景



(2016 年 3 月 19 日筆者撮影)

次に教授言語について考察する。教授言語が英語に据えられた理由は、国家の経済発展を見据えたためであると考えられる。現在のルワンダで経済発展の中核を担う「ディアスポラ」²³⁾の多くは英語を話すため、それを勘案してルワンダ政府は英語の普及を進めている。ディアスポラは自発的な移民や「社会革命」以降国外へ逃れたルワンダ人であり、その数は 50 万人といわれる（Peace insight）。彼らは移住先で知識や技術や外国語を培い、ルワンダ政府は彼らに経済発展の中核を担わせるため帰還を推進している（Paul Kagame）。その背景から、ルワンダ政府は英語話者を育成し経済を発展させるために教授言語を英語にしたと考えられる。

またルワンダの教育制度にスワヒリ語が取り入れられた理由は、スワヒリ語話者を育成することを視野に入れていると考えられる。ルワンダがスワヒリ語圏と連携して経済発展を目指すうえで、スワヒリ語話者に参画してもらうことが必須となるからである。また政権の中核を担う政治家や軍人がスワヒリ語を話すことも、スワヒリ語の普及に影響を与えていると考えられる。彼らは「社会革命」以降スワヒリ語圏に逃れたため、スワヒリ語を話すことができる（ダレール 2012: 349）。彼らが行政機関でスワヒリ語を広く使うことで、民間レベルに波及していくと推測される。

²³⁾ ディアスポラという言葉は、「撒き散らされたもの」を意味するギリシャ語に由来する。古代ギリシャを離れて地中海や黒海の沿岸に進出し、コミュニティを作っていたギリシャ人を指したことが始まりである。それがイスラエルを離れて暮らすユダヤ人や、中国を離れて暮らす華僑に汎用されるようになり、ルワンダを離れて暮らすルワンダ人にも汎用された。

5. スワヒリ語を話すルワンダ人の背景と言語態度

5.1. ルワンダにおけるスワヒリ語の使用状況

2002 年に実施された国勢調査では、スワヒリ語を話すルワンダ人は、首都キガリでは 16%、全国平均では 3%である (Ministry of Finance and Economic Planning National Census Service 2005: 41)。2002 年の統計ではスワヒリ語話者の割合は少ないが、筆者が現地へ行った 2009～2016 年での経験からは、スワヒリ語話者は増えているという印象を受けた。そのような印象をもったひとつめの理由は、日常会話でスワヒリ語の挨拶や単語が広く使われているからである。よく聞くスワヒリ語は *karibu* 「ようこそ」である。ルワンダ語にも「ようこそ」にあたる *murakaza neza* という言葉があるが、頻繁に耳にするのは、短く発しやすいスワヒリ語の方である²⁴⁾。さらにスワヒリ語の *asante* 「ありがとう」もよく耳にする²⁵⁾。首都キガリのスーパーマーケットの店舗名 *Simba* 「シンバ」は、スワヒリ語でライオンを意味する。「シンバ」はルワンダで経営されているが、ルワンダ語でライオンを意味する *intare* ではなくスワヒリ語の *Simba* が店舗名になっている²⁶⁾。

スワヒリ語話者が増えたと考えられるその次の理由は、スワヒリ語を話すルワンダ人と会話する機会が多かったからである。ジェノサイドの聞き取り調査で訪問したルワンダ大学の研究員とは常にスワヒリ語でやりとりをした²⁷⁾。またルワンダとタンザニアの国境で荷物検査を受けた時に、ルワンダ語がわからない筆者のためにルワンダ人が流ちょうなスワヒリ語で通訳をしてくれた²⁸⁾。さらにジェノサイドの追悼施設の観光ガイドは、流ちょうなスワヒリ語で案内してくれた²⁹⁾。他には、キガリ国際空港で筆者はルワンダ人の職員にスワヒリ語で話しかけると、スワヒリ語で応じてくれた。このように、首都キガリ、第二の都市フエ、タンザニアとの国境という限られた行動範囲でも多くの場面でスワヒリ語を用いたコミュニケーションが可能であったことから、スワヒリ語話者は増えていると考えられる。

²⁴⁾ 標準スワヒリ語では、1 人に対しては *karibu*、複数人に対しては *karibuni* になる。しかし、ルワンダ人は 1 人に対しても複数人に対しても変わらず *karibu* を使う。

²⁵⁾ 2022 年 10 月 3 日、SNS で行った筆者によるルワンダ在住の日本人への聞き取りより。

²⁶⁾ 2009 年当時シンバ スーパーマーケットはキガリに 1 店舗しかなかったが、2022 年現在は 6 店舗に増えた。

²⁷⁾ 2009 年 9 月 1 日、フエ (Huye) 郡にて行った筆者によるマララ (Jean Marara) 研究員との会話より。

²⁸⁾ 2009 年 8 月 30 日、キガリで書いた筆者のフィールドノートより。

²⁹⁾ 2009 年 8 月 31 日、ニヤマタとンタラマで書いた筆者のフィールドノートより。

5.2. スワヒリ語を話すのはどんな人たちなのか？

次に、筆者が出会ったスワヒリ語を話すルワンダ人にどのような背景があるのか、彼らはスワヒリ語に対してどのような言語態度なのか、それらを3つに分けて考察する。

5.2.1. 難民であれ、それ以外の理由であれスワヒリ語圏から帰還した人

スワヒリ語を話すルワンダ人のなかには、「社会革命」やジェノサイドでスワヒリ語圏に逃れ、逃れた国でスワヒリ語を習得しルワンダに帰還した者がいる。「社会革命」ではトウチ約20万人が近隣諸国に逃れたが、そのなかにはスワヒリ語圏のタンザニアやケニアが含まれている。

ジェノサイドでは、RPFからの報復を恐れたフトウ約200万人が近隣諸国に逃れた³⁰⁾。逃れた先はコンゴ民主共和国（以下コンゴ）東部とタンザニア西部が突出して多く、いずれもスワヒリ語が話される地域である³¹⁾。コンゴ東部のゴマ（Goma）やブカヴ（Bukavu）やウヴィラ（Uvira）には、124万4,000人が逃れ（Prunier 1997: 312）、2年後にコンゴで紛争³²⁾が引き起こされ、かなりのフトウ難民がルワンダに帰還した（武内 2017: 262）。

タンザニア西部には、ンガラ（Ngara）とカラグウェ（Karagwe）の難民キャンプに57万7,000人が避難し、2年が経過しても53万3,000人が避難したままであった（Prunier 1997: 312; 374）。2016年にタンザニア政府はルワンダ難民に帰還を呼びかけ、拒否する者を軍で包囲し、強制的に帰還させた（Prunier 1997: 386）。

この強制的帰還によって、1959年の「社会革命」で逃れたルワンダ人は57年間、1994年のジェノサイドで逃れたルワンダ人は22年間タンザニアに在住していたことになり、この長期間の在住でルワンダ人はスワヒリ語を習得したと考えられる。53万人のルワンダ

³⁰⁾ 当時のルワンダ人口は700万人であり、国外に逃れたフトウの人数は人口の3分の1弱である（Prunier 1997: 312）。

³¹⁾ タンザニア西部とコンゴ東部でスワヒリ語が話されていることは、以下のことから確認できる。まずタンザニアは、ほぼ全域でスワヒリ語が話されていると先行研究に記されている（沓掛 2018: 5）。次にコンゴ東部は、アメリカの非営利組織「国境なき翻訳者団」によればスワヒリ語が話されていることを示している（Translators without Borders）。さらにコンゴ東部でスワヒリ語が話されていることを示すのは、2018年にノーベル平和賞を受賞したコンゴ人のムクウェゲ（Denis Mukwege）医師のドキュメンタリー映画『女を修理する男』である（2015年、ベルギー制作）。彼はコンゴ東部のブカヴにパンジ病院を設立し、紛争で性暴力被害に遭った女性たちの治療に尽力している。作中では、病院患者との会話、教会の説法、性暴力被害を撲滅するための集会など、あらゆる場面でスワヒリ語が話されている。

³²⁾ コンゴ紛争の詳細は華井（2016）、コンゴ東部に逃れたルワンダ難民の詳細は米川（2017）を参照。

人が帰還したことを踏まえると、ルワンダ人のスワヒリ語話者は相当数いると推察できる。

以上の背景に当てはまる聞き取り調査の事例を挙げる。男性（70代）はジェノサイドでタンザニアに逃れて帰還し東部州ンゴマ（Ngoma）郡の農村に在住する。彼はタンザニアで生活するためにスワヒリ語を習得し、スワヒリ語を流ちょうに話す³³⁾。彼は筆者にスワヒリ語で積極的に話してくれた。ルワンダに帰還し日常的にスワヒリ語を使う頻度は極めて少なくなったが、使う頻度が減っても長年タンザニアで暮らしていたことからスワヒリ語に肯定的な言語態度をもち続けている。また周囲の住民はスワヒリ語を話せないが、彼がスワヒリ語を話すことでスワヒリ語に親近感をもっており、筆者がスワヒリ語を話すことを知ると彼に筆者を積極的に引き合わせようとしてくれた。もし仮に否定的な感情をもっている言語であれば、住民は筆者を彼に引き合わせようとはしないだろう。このことから、スワヒリ語を話せない住民もスワヒリ語に肯定的な言語態度を持っていると考えられる。

また難民以外の理由でスワヒリ語圏から帰国したルワンダ人もスワヒリ語を話す。男性（20代）はスワヒリ語圏のケニアで電気工学を学び、短期間でスワヒリ語を習得してンゴマ郡の農村に在住する。彼はルワンダのプライマリースクールから英語を学んでいるため英語とスワヒリ語を流ちょうに話す、スワヒリ語には親しみをもち積極的にスワヒリ語を話す肯定的な言語態度である³⁴⁾。

5.2.2. コンゴ人との接点がある人

ルワンダに隣接するコンゴ東部の人々はスワヒリ語を話す。彼らとの接点があるルワンダ人のなかにもスワヒリ語話者がいる。ルワンダ大学の学生（男性20代）は、ルワンダ西部とコンゴ東部の国境沿いで育ち、国境沿いを往来するコンゴ人とスワヒリ語で話していたためスワヒリ語を習得した³⁵⁾。彼は幼い時からスワヒリ語に馴染みがあり、父親が彼のミドルネームにスワヒリ語を取り入れていることから、彼も父親もスワヒリ語に肯定的な言語態度であると推測される。

³³⁾ 2012年6月15日、ンゴマ郡で書いた筆者のフィールドノートより。

³⁴⁾ 2016年7月14日、ンゴマ郡にて行った筆者によるルワンダ人との会話より。

³⁵⁾ この大学生は「日本ルワンダ学生会議」（Japan-Rwanda Youth Cooperation）に紹介してもらった。この団体では、日本とルワンダの大学生が学術交流および文化交流を行っている。<https://jp-rw.jimdofree.com>（2022年9月27日閲覧）

また西部州ルバヴ (Rubavu) 郡在住の男性 (30 代) は、コンゴの大学に通学していた時にバスに乗り合わせるコンゴ人と頻繁に会話しスワヒリ語を習得した。彼はその言語能力を仕事に活かし、ルワンダとコンゴの国境沿いの露天市場でコンゴ人の客にスワヒリ語で応対する³⁶⁾。彼にとってスワヒリ語は、生計を立てるための実用的な言語である。

また違う事例では、コンゴ生まれの親をもちコンゴ人との接点をもっていたルワンダ人 (男性 30 代) が、彼の 2 人の子どもにスワヒリ語の *baraka* 「祝福」と *bahati* 「幸運」と名付けた³⁷⁾。彼の妻によれば、名付けた理由は彼の親がコンゴに生まれスワヒリ語を話すことで、彼自身もスワヒリ語が好きだからである³⁸⁾。彼の親がコンゴで生まれたということは、彼の祖父母が 1950 年代頃にコンゴに移住していたことになる。当時コンゴとルワンダはベルギーに統治され、ベルギー当局はルワンダ人にコーヒーのプランテーションや炭鉱への出稼ぎを勧奨し、多数のルワンダ人がコンゴに移った (武内 1997: 5)。このことから、コンゴ人とルワンダ人は関係が深く、彼はコンゴ人が話すスワヒリ語に対しても肯定的な言語態度をもっていると推測される。

5.2.1.と 5.2.2.で挙げたスワヒリ語を話すルワンダ人は、差し迫った理由があってスワヒリ語を使用しているため、自らが使いたいと思っているのかどうかはわからないが、積極的にスワヒリ語に関わろうという姿勢が見られることから、少なくとも否定的な感情を持っているわけではないと推測される。またスワヒリ語を話すルワンダ人と関わる人は、差し迫った理由がなくてもスワヒリ語を身近に感じている印象を受ける。彼らはスワヒリ語圏の歴史やスワヒリ文化やスワヒリ語話者と接点をもつことで、スワヒリ語に関心があると考えられる。

5.2.3. スワヒリ語の義務教育を受けた／受けている人

ルワンダではスワヒリ語が公用語に追加されたことで、学生は学校でスワヒリ語を学ぶ機会を得るようになった。これまで積極的にスワヒリ語を話すルワンダ人の事例を挙げたが、スワヒリ語に対して否定的な意見も聞かれ、消極的な言語態度をもつ事例もある。SNS を用いた聞き取り調査では、ルワンダ人 (男性 30 代) は、「スワヒリ語を学校で習っ

³⁶⁾ 2022 年 7 月 6 日、SNS で行った筆者によるルワンダ人への聞き取りより。

³⁷⁾ 2022 年 6 月 14 日、SNS で行った筆者による西部州ルツィロ郡在住のルワンダ人への聞き取りより。

³⁸⁾ 2022 年 6 月 14 日、SNS で行った筆者による西部州ルツィロ郡在住のルワンダ人への聞き取りより。

ても、親はスワヒリ語を理解できず実生活で話すことはない」と消極的な言語態度である³⁹⁾。

またセカンダリースクールでスワヒリ語を教える教員（男性 30 代）は、「学生はスワヒリ語の授業を受けても、授業が終わり教室を一步出ればルワンダ語で話している」と述べた⁴⁰⁾。スワヒリ語を積極的に使わないことから、学生はスワヒリ語に対して消極的な言語態度である。

また別の聞き取り調査の事例では、スワヒリ語を学んだ女性（30 代）は、「子どもたちは学校で『外国語』としてスワヒリ語を学ぶが、卒業後も継続して学ぶ機会はなくスワヒリ語を話さない」とスワヒリ語に消極的な言語態度である⁴¹⁾。

さらに東部州ニャガタレ（Nyagatare）郡に在住する日本人（男性 30 代）は、高齢のルワンダ人からスワヒリ語を話すことができるかを聞かれるが、若いルワンダ人からは聞かれないことから、高齢者はスワヒリ語に肯定的な言語態度だが、若者はスワヒリ語に消極的な言語態度であるという見解を示す⁴²⁾。

5.2.3.で挙げたスワヒリ語の義務教育を受けるルワンダ人は、教育を受けても継続してスワヒリ語を話す機会はなく、スワヒリ語に関心をもつまでには至らず、スワヒリ語に消極的な言語態度をもつ。仮にスワヒリ語圏の歴史やスワヒリ文化やスワヒリ語話者への接点をうみだすような教育カリキュラムが組まれれば、スワヒリ語への関心が高まり肯定的な言語態度をもつようになると考えられる。

6. おわりに

本稿はルワンダの歴史を辿り、言語政策や教育制度から支配言語の移り変わりを示し、現地調査と SNS を用いた聞き取り調査から、ルワンダ人がどのような背景でスワヒリ語を話すのか、彼らがスワヒリ語に対してどのような言語態度をもつのかを考察した。スワヒリ語圏から帰還した者やコンゴ人との接点のある者は、スワヒリ語に肯定的な言語態度を示した。一方で、ジェノサイド後にスワヒリ語の義務教育を受けた者は、スワヒリ語を継

³⁹⁾ 2022 年 7 月 8 日、SNS で行った筆者による西部州ンゴロレロ（Ngororero）郡在住のルワンダ人への聞き取りより。

⁴⁰⁾ 2022 年 6 月 18 日、SNS で行った筆者による西部州ンゴロレロ郡在住のルワンダ人への聞き取りより。

⁴¹⁾ 2022 年 6 月 14 日、SNS で行った筆者による西部州ルツィロ郡在住のルワンダ人への聞き取りより。

⁴²⁾ 2022 年 6 月 13 日、SNS で行った筆者による日本人への聞き取りより。

続して話す機会がなく消極的な言語態度を示した。本稿で挙げた事例を考察すると、スワヒリ語圏の歴史やスワヒリ文化やスワヒリ語話者と接点を持ち、スワヒリ語への関心をもつか否かで、肯定的あるいは消極的な言語態度に分けられる。

ルワンダは 1899 年にドイツに統治され行政言語にスワヒリ語が導入されたが、1924 年にベルギーに統治されたことで、行政言語はスワヒリ語からフランス語に取って代わった。しかし EAC の公用語にスワヒリ語が定められたことで、ルワンダは公用語にスワヒリ語を追加し、教育制度に取り入れ、再びスワヒリ語と関わる状況になった。今後東アフリカ諸国の連携が強まり、東アフリカの共通語であるスワヒリ語がさらにルワンダに普及すれば、スワヒリ語への関心が高まり、肯定的な言語態度になることが期待される。

ルワンダは国際社会と渡り合うために外国語の普及を進めているが、ルワンダ人は国語であるルワンダ語に対してどのような言語態度をもっているのか。ルワンダ人大学生の男性（20 代）は「英語が台頭してもルワンダのアイデンティティを大事にしたい」と述べる⁴³⁾。また長期の海外生活を強いられ帰還したディアスポラが「英語は話せてもルワンダ語は話せない」と人々に揶揄されるのは、人々がルワンダ語に価値を置いている証左であろう⁴⁴⁾。人々は「文化のない国は滅びる」(*agahugu katagira umuco karacika*) という諺を口にするように、ルワンダ語は 1400 年代から豊かな口頭文芸を語り継ぐ役目を果たしてきた。ルワンダの人々は外国語と縁を深めつつも、国語を絶やさず残していくことを望んでいるのではないだろうか。ルワンダ人は、ルワンダ語に対して肯定的な言語態度をもっていると考えられる。

⁴³⁾ 2009 年 9 月 3 日、フエ郡にて行った筆者によるルワンダ人の大学生との会話より。

⁴⁴⁾ 2015 年 3 月 14 日、西部州ンゴロレロ郡にて行った筆者によるルワンダ人への聞き取りより。

図 1. ルワンダの位置



図 2. 本稿に出てくる国名および地名



謝辞

査読者から細部に至るまで丁寧なご助言を賜り、心より感謝申し上げます。

参考文献

- 石田勇治. 2011. 「ジェノサイド研究の課題と射程 — 比較の視座から」 石田勇治・武内進一（編）『ジェノサイドと現代世界』 pp.3-21. 勉誠出版.
- 片山夏紀. 2020. 『ルワンダの今 — ジェノサイドを語る被害者と加害者』 風響社.
- 北川香織. 2015. 「ルワンダにおける教授言語変更後の学校教育 — 公立初等学校で働く教員の視点から」『アフリカ教育研究』 6, 150-164.
- 沓掛沙弥香. 2018. 「東アフリカ諸国の言語政策 — スワヒリ語への期待の高まりと進む英語化」『言語政策』 14, 1-28.
- 武内進一. 1997. 「「部族対立」がはじまるとき — ルワンダ、ザイールの紛争をめぐって（特集 紛争問題） —」『アフリカレポート』 24, 2-7.
- . 2009. 『現代アフリカの紛争と国家—ポストコロニアル家産制国家とルワンダ・ジェノサイド』 明石書店.
- . 2017. 「土地政策と農村変容—ルワンダ、ブルンジ、コンゴ民主共和国西部」 武内進一編『現代アフリカの土地と権力』 アジア経済研究所 259-291.
- ダレール, ロメオ（金田耕一訳）. 2012. 『なぜ、世界はルワンダを救えなかったのか — PKO 司令官の手記 —』 風行社.
- 鶴田綾. 2018. 『ジェノサイド再考 — 歴史のなかのルワンダ』 名古屋大学出版会.
- 服部正也. 2009. 『ルワンダ中央銀行総裁日記 増補版』 中央公論新社.
- 華井和代. 2016. 『資源問題の正義 — コンゴの紛争資源問題と消費者の責任』 東信堂.
- 米川正子. 2017. 『あやつられる難民—政府、国連、NGO のはざままで』 筑摩書房.
- Des Forges, Alison. 1999. *Leave None to Tell the Story: Genocide in Rwanda*. New York, Human Rights Watch.
- Long, Katy. 2012. “Rwanda's first refugees: Tutsi exile and international response 1959-64”, *Journal of Eastern African Studies*, 6(2), 211-229.
- Maniraho, Sigfrid. 2013. *Attitudes and Motivation of Teacher Training College Teachers and Students toward English Learning and Use as Medium of Instruction in Rwanda*. Unpublished MA Thesis, University of the Witwatersrand.
- Ministry of Education. 2010. *Education Sector Strategic Plan 2010-2015*. Kigali, Ministry of Education.

- Ministry of Finance and Economic Planning National Census Service. 2005. *A Synthesis of the Analysis of the 2002 Census of Rwanda*. Kigali, Ministry of Finance and Economic Planning National Census Service.
- NSGC (National Service of Gacaca Courts). 2012. *Summary of the Report Presented at the Closing of Gacaca Courts Activities*. Kigali, NSGC.
- Ntakirutimana, Évariste. 2012. “La langue nationale du Rwanda: plus d’un siècle en marche arrière”, *Collection Note de recherche de l’ODSEF*.
- Prunier, Gérard. 1997. *The Rwanda Crisis: History of a Genocide*. revised ed, London, C. Hurst & Co.
- Republic of Rwanda. 2015. *Rwanda's Constitution of 2003 with Amendments through 2015*.
- Rurangirwa, Straton. 2012. “The Absence of Kinyarwanda in the Current Language Policy of Rwanda”, *The Journal of Pan African Studies*, 5(8), 169-177.
- Samuelson, Beth Lewis and Sarah Warshauer Freedman. 2010. “Language policy, multilingual education, and power in Rwanda”, *Language Policy* 9, 191-215.
- Service de la Législation de la Présidence de la République Rwandaise. 1962. *Constituion de la République Rwandaise*, Kigali, Imprimerie du Rwanda.
- Vansina, Jan 2004. *Antecedents to Modern Rwanda: The Nyiginya Kingdom*. translated by the author, Madison, The University of Wisconsin Press.
- Walker-Keleher, Jessica. 2006. “Reconceptualizing the Relationship between Conflict and Education: The Case of Rwanda”, *The Fletcher Journal of Human Security* 21, 35-53.

参考ウェブサイト

- APA News. 2021. August 4. “Rwanda seeks to hire Kiswahili teachers from Tanzania”
<http://apanews.net/en/news/rwanda-seeks-to-hire-kiswahili-teachers-from-tanzania> (最終閲覧 2022 年 9 月 23 日)
- Baraka. <https://africafe.jp> (最終閲覧 2022 年 12 月 17 日)
- EAC (East African Community). <https://www.eac.int> (最終閲覧 2022 年 9 月 25 日)
- JICA (Japan International Cooperation Agency). 「代表的なプロジェクト」
<https://www.jica.go.jp/rwanda/office/activities/index.html> (最終閲覧 2022 年 9 月 25 日)

JICA 海外協力隊. 「事業実績／派遣実績」

<https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/results/jocv.html> (最終閲覧 2022 年 9 月 25 日)

NewSphere. 2022. July 1. 「コモンウェルス会議、ルワンダ開催の『矛盾』」

<https://newsphere.jp/world-report/20220701-1/> (最終閲覧 2022 年 12 月 20 日)

Paul Kagame. 2010. December 6. <https://www.paulkagame.com/president-kagame-meets-rwandan-diaspora-in-brussels-brussels-04-december-2010/> (最終閲覧 2023 年 1 月 15 日)

Peace insight. 2017. August 7. “The Rwandan diaspora: a vital but neglected part of post-genocide reconciliation” Jean de Dieu Basabose. <https://www.peaceinsight.org/en/articles/rwandan-diaspora-vital-neglected-part-post-genocide-reconciliation/?location=rwanda&theme=conflict-prevention-early-warning> (最終閲覧 2022 年 9 月 25 日)

Rwanda Development Board. “Overview” <https://rdb.rw/investment-opportunities/agriculture/> (最終閲覧 2022 年 9 月 24 日)

The Citizen. 2016. August 29. “Eala okays Kiswahili as official EAC language”

<https://www.thecitizen.co.tz/tanzania/news/national/eala-okays-kiswahili-as-official-eac-language-2565778> (最終閲覧 2022 年 9 月 25 日)

The Commonwealth. <https://thecommonwealth.org> (最終閲覧 2023 年 1 月 15 日)

The Conversation: Academic rigour, journalistic flair. 2022. June 23. “Kinyafanglais: how Rwanda became a melting pot of official languages”

<https://theconversation.com/kinyafanglais-how-rwanda-became-a-melting-pot-of-official-languages-185441> (最終閲覧 2022 年 12 月 18 日)

The World Bank in Rwanda. “Overview” <https://www.worldbank.org/en/country/rwanda/overview> (2022 年 9 月 25 日閲覧)

Translators without Borders. “Language map of DRC: Interactive (EN), The reach of different languages in DRC” <https://translatorswithoutborders.org/language-map-of-drc-interactive-en/> (2022 年 9 月 26 日閲覧)